

編者より：双極症の「治療主体感」

福田正人 群馬大学名誉教授/本誌編集委員

双極症の治療は、病状が安定してからも継続するというのが、現在の精神医療の推奨である。それを踏まえて、「治療を終える」という難しいテーマについて、深い経験に基づく知恵をいただくことができた。

「逆説的ではあるが、薬物療法を終えるという選択肢を持つことこそが、薬物療法の継続のために、有効な方法ということになる」（加藤忠史氏）、「『治療を終えたい』と願うのは当然であると、患者の感情を肯定」し、「“無理が利く”健康な自分には戻ることができないという喪失感に寄り添いながら、新しい生活スタイルを模索する患者を支える」（利重裕子氏・水島広子氏）、「セルフ・コンパッションが生まれ…自分の人生に意味を見出せ…多少の困難は乗り越えていける自分に対していささかの誇りと自信を持てている」（寺尾岳氏）というコメントのいずれもが、治療の主体は自分であるという当事者の感覚を元にしたものであることが印象に残った。「治療主体感」と呼べばよいだろうか。

当事者エッセイにある、「病気との付き合いは修行だと思いなさい」と言われた言葉を「『病気をとおしながら自分を成長させていきなさい』という意味合いに捉え」たこと、「『修行』のなかで身に付けてきた読書・椅子静座・詩作」をライフワークとしてより一層深めていきたいという願い（庄司文雄氏）は、その具現化ではないかと思う。

「完全寛解に至り、治療終結が可能な患者もまれながら存在するであろう」（寺尾氏）という、治療継続の必要の個別性についての注目も大切になる。妊娠を理由に長年続けたリチウムを中止して紹介されてきた方を、気分安定薬を再開できないままフォローせざるをえなかった経験が、何回かある。いずれも病状悪化を来さず出産と育児を無事に経験できたのは、どういう要因が幸いしたのだろうか、今も考えている。